國學院大學学術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学．教育思想, NDC8:161.3, 宗教学．宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

総合討議

司会：井上順孝

井上　それでは最後の総合討議に入らせていただきます。企画者といたしましては、本日のフォーラムのような試みは、日本でそうそうあるものではなく、しかもこれから深めていくべきテーマとして設定したものです。したがいまして、いわば出発点のようなものにあたって、考えるべきことをみなさんと共有しましょうという意味が大きいわけです。いろんな意見を自由に出していただいて、議論を深めたいと思います。さまざまな立場からのプレゼンテーションがあり、コメントも非常に興味深いものでした。

こういうことをやるときの常套手段ともいうべきことですが、一つは理論的な用意をする必要があります。最初の近藤さんの発表はそれを意識したところがあったと思いますけれども、理論的なものを踏まえて取り組むことが大事でしょう。もう一つは具体的な事例に即して物事を考えていくということです。中町さんの発表とかビュテルさんの話では具体的な事例を出していただきました。映画と宗教について考える際にも、この２つの視点は必要でありまして、どちらか一つというわけにはいきません。そういう意味では両方バランスよく提起していただいて今日は大変面白かったと思います。通常は発題者からのリプライから始めることが多いようですが、長時間辛抱強く聞いていただいた聴衆の方の質問から入りたいと思います。そして残った時間をレスポンデント及び発題者の方々からの質問を交えて議論したいと思います。

最初に黒崎浩行さんが質問をされていますので、どうぞ。

黒崎　最初の近藤さんの発題が私は印象的だったのですが、宗教と世俗の二分法を問い直すという視点から映画というものを素材に使ってみるという問いかけだったと思います。さまざまな世界中の宗教文化が映画の中に映し出されていて、それを授業の中で使うというのは、ディレクターの視点だとかいろんな問題があるにしても比較的容易にできることだと思いますけれども、そうではなくて理論的な課題を学生に投げかけるときに、それにふさわしい映画を探し出すのは非常に難しいような気がしますけれども、たとえばこういったものが一つあるのではないかと思います。それは、職業的な宗教者が画面の中に登場しながら、その人が結局宗教的に機能していないというような映画が最近あるように思い

ます。例えば、去年大ヒットした『おくりびと』ですとか、アメリカの映画でいいますと『ミリオンダラー・ベイビー』というイーストウッド監督の映画があります。安楽死を扱った映画です。ここでもやはりカトリックの司祭が登場しながら彼のアドバイスがなかなか主人公の心に響いてこないということがありまして、結局主人公は自分で苦悶して結論を出すわけですけれども、そういった映画を通じて、宗教が答えるべきとされていた問題が今は世俗の領域において皆苦しみながら答えを見つけ出そうとしている。そういった中で宗教というのをある種反転したものとして描く、ひょっとしたら今の学生にとっては、日本人かもしれませんけど、こうした映画を取り上げる価値があるのかなと思うのですけれども、そういった点についてご意見をいただければと思います。

井上　これはご指名ですから、近藤さん、お答えを願います。

近藤　ありがとうございます、黒崎さん。黒崎さんは私の大学の先輩でありまして、こういった形でお話できるのを大変嬉しく思っております。質問にお答えしますけれども、その前に特にビュテル先生とワトキンス先生の発表を聞いて恥ずかしくなったというか、日本の教育界の現状がひどいと思われては困るので、まず 30 秒だけコメントさせてください。僕の今日の発表で学生に一方向的に上から教えるような印象を与えたとしたら、僕のプレゼンテーションが間違っていたと。僕はワークショップ型の授業しかやったことがないわけです。複雑なことをできるだけ簡単にしゃべろうとしたということもあります。とにかく僕は答えを出さない。学生と議論をして材料を与えて、学生から気付いてくれるような授業をやっています。東洋の古い先生のイメージを強くしてはいけないなと、ビュテル先生は大丈夫でしょうが、ワトキンス先生は日本が初めてということでしたので、ちょっと話させていただきました。

さて黒崎さんのお話ですけれども、私がぜんぜん考えていなかったポイントで、非常に参考になりました。『ミリオンダラー・ベイビー』は実は観ていないので今度観てみたいと思います。これが学生にどう伝わるのかは、ちょっとまだ僕の関心の中ではなんとも言えないので、まだもうちょっとがんばってやりたいなと、また考えていきたいなと思います。次に『おくりびと』についてですが、実は宗教学を学ぶ人の映画ということで僕がリストにしている作品、十本くらいしかないんですが、その中の一つに入っています。いろんな捉え方のある映画だと思うのですけれども、どういう文脈であれを伝えていったらいいのかと、そこらへんを今考えている最中です。一つだけ言えるのは、今日話題に出ませんでしたけれども、穢れの問題ですね。あの映画ほど上手に穢れの問題を出している映画はないということが、僕には非常に印象的です。ヒンドゥー教の勉強をしているせいかも

知れませんが、むしろ『おくりびと』はそちらのほうで僕は非常に注目しておりました。黒崎さんからのアドバイスをうけて、今後さらに考えていきたいと思います。

井上　会場からの質問があります。映画の中でつくられる恐怖ということで、直接質問していただきます。

質問者A　映画の中での恐怖を刺激するシーンというのは、情動を刺激する効果がありますし、監督やアニメ作家、映像技師にとってそれは腕の見せ所だと思います。その一方で、実際の宗教においても恐怖や苦痛、役者が感じるものと観客が感じるものの2つあると思いますが、恐怖と苦痛は宗教体験に類似したものであると思われます。ここから質問になりますが、教室で使った場合に、恐怖を表すシーンは情動を刺激するが故にかえって観客、学生たちを誘導してしまう危険はないでしょうか。ワトキンスさんの発表の一部にその答えがあったように思いますが、特に具体的に映画を扱ったビュテルさんとジョリオンさんにご意見を伺いたいと思います。

ジョリオン　これは大変面白い質問だと私は思っています。観客は恐怖などの感情に惹かれてしまう恐れもあるかという点もありまして、そのような強い感情はどうやって教室で取り扱うかということになるでしょうか。これは大変難しいところだと思いますが、教員の役割は実際に映画だけではなく宗教そのものを教えることは危ない領域に触ることになると思います。ですから、私の発表では映画は宗教のテキストではないとはっきりいっていましたが、やはりこの場合は他の宗教のテキストと同様に、ある学生は聖書に強く惹かれるかもしれないし、強く仏教の経典に興味を持つ学生もいるかもしれませんが、教員はできるだけテキストを冷静に平等に学生に提供することが宗教学の教育法の根本的な態度だと思います。もちろんアメリカの学会では、このような常識に対する反論も出てきているようですけれども、どちらかといえば正直に学生に映画の情操的な面について、前もって話す必要があるのではないかと私は思います。つまり、ワトキンス先生のお話にも出てきましたが、授業の最初にこの映画というものは何なのかという質問を教員から一方的に話すのではなく、学生と対話的に話すことが重要ではないかと思います。これはちゃんとした答えにはなっていないかもしれませんが、一応すぐに解決できないものだと思います。

ビュテル　私はたいしたコメントしかできないんですけれども、確かに普通の授業だと学生は寝たり、隣の人と話したりするんです。でも、映画を見せるとき、ぽんぽこを見せるときはなぜかすごく静かで、学生が感動しているというのが感じられるんです。ある人が

涙を流したり、ある人が笑ったりする。映画館での映画だったら、そういう感動はわかりますけど、慣れてない大学でそういう映画を見られるというのも、また新しく感動すると思います。私はその感動の危険性とかはあまり考えていません。雨戸を開けたら、電気をつけたら普通の世界に戻るという感じがしますので、それほど私にとっては大切な問題ではないのではないかという気がします。

井上　恐怖とは少し違うかもしれませんが、私はかつて映画ではなくて教団の制作したビデオを見せたことがあります。その中で、病気治しのシーンがあって、血が出るような場面があったんです。あとで一人の学生が貧血を起こしたようだということを聞きまして、次の年度からそのシーンはカットしました。おそらく理論的に一般的にそういったものをどう扱うべきかという問題と、この場面は、少しショックが強そうだから避けたほうがいいといったような具体的判断というものがあると思います。後者は、線引きがなかなか難しいという気がするんです。あまり安易なものを見せていても、伝わらないという場合もあるので、この辺はジョリオンさんもすぐには解決が付かない問題とおっしゃいましたけれど、考えておかないといけないというものの一つかなと思います。他のレスポンデントの方で何かコメントはありますか。

山中　今の問題は非常に大事だと思うんですね。ワトキンス先生のペーパーでありましたように、先生の場合はかなり丁寧にディスカッションをして、この映画が持っている意味はなんだろうかということについて始めからかなりしっかりやられていると思うんですね。こういう場合、指導者（先生）のティーチング能力が非常に大事で、やはり映画の性格上、使う側があまり意図していなくても、学生はものすごく強いインパクトを受ける可能性が十分あるわけですね。面白そうだからだとか、イスラーム教が良くわかるからといったプラグマティックな仕方で映画を見せたとき、フィルムディレクターの意図が、先生には感じられなくても学生のほうに非常に強く感じられてしまったという場合もあると思うのですね。少なくとも、そうした可能性はあると思います。そのときに大事なのは、素材を提供する先生の側でのかなり綿密な検討といいますか、リーダーシップといいますか、そういうものがないと、やはり難しいのではないかと思います。その意味でこの問題というのは、映画を考えるときに先ほどから出ているテキストとしての映画の問題や聴衆者がどう受け取るかというような問題以外に、映画自体が持っている非常にパワフルな力というものに対して教える側がどう考えるのかをきちんと吟味しておく必要があるのではないかと思いました。

井上　非常にありがたいご意見だと思います。これと少し関係するのですが、ＢＧＭということについての質問を受けたいと思います。

質問者Ｂ　ビュテルさんにお伺いしたいのですが、アニメの映像ではなくて、アニメと一緒に流れているＢＧＭがどういう効果を表しているか事例を教えてください。

ビュテル　本当にぽんぽこの場合は細かく考えられているＢＧＭですね。わたしにとってすごく難しいです。絵だったらこの本を見ればこの絵だと、例えば中世の絵巻などはわかるんですけれども、音楽だけだとすごくわかりにくいんです。例えば最後のシーンに普通のサラリーマンになった狸が自分のふるさとに戻って、――ふるさとというよりゴルフ場になっているんですが――、ゴルフ場には他の狸がいて一緒に遊ぶんです。ゴルフ場に入るとき「故郷（ふるさと）」という、明治時代かの歌が聞こえるんですが、２秒程度しか聞こえないんです。細かくインパクトがあるように考えられているものですけれども、私はそういう知識はあまりないし、学生に「故郷」の歌について説明したのですが、一時間ぐらいかかったんですよね。説明するのはできるのですが、教えるのはすごく難しい作業だと思います。

井上　ＢＧＭだけでなく、映画の中での音楽というと、音楽が頻繁に使われるインド映画の問題がありますし、イスラーム関係も音楽という要素も切り離してというわけにはいかないのでしょうけれども、映画の意味を考えるときには、大事な場合があるかもしれないので、その辺は臼杵さんいかがでしょうか。

臼杵　有名な映画で事例を言えば、『シンドラーのリスト』があります。最後の場面でそれまでのモノクロから反転してカラーになるとき流れる音楽がイスラエルで問題になりました。つまり『黄金のエルサレム』という、たまたま 67 年の第三次中東戦争直前に作られてヒットした歌が流れた。あのコンテクストだとホロコーストを生き延びた人達が戻っていく、戻っていく先というのはおそらく新生イスラエルであろうと想像できるわけです。それならば建国の時期の 1948 年だから『ハ・ティクヴァ（希望）』というイスラエル国歌を流すべきだという議論があったんですね。ところがスピルバーグ監督はこの曲を使うことで、建国から一挙にとんで 67 年の「エルサレム解放」の話にしてしまった。

エルサレム解放は、ユダヤ教の聖地の解放というイスラエルの勝利で、宗教的な意味もありますし、政治的な意味もある。このような音楽の使い方が、いわば映画の中で政治的メッセージとして受け止められて論争になるような問題もある。つまりイスラエル側では

67年のエルサレムの占領、エルサレムをヨルダンから奪回するということが政治的な問題であって、議論の対象になるわけで、それを紛争から遠いアメリカのユダヤ人としてあまりにもナイーブに使ってしまっているという問題、そういう意味でイスラエル内部で反発があったという議論が紹介されています。こういうのが音楽の政治性の一番良い例ではないかと思われます。

井上　ありがとうございました。ワトキンスさんの話の中で、音楽の要素というものがなかったような気がするんですが。

ワトキンス　私は、映画制作者の音楽の使い方について批判的な面があります。なぜかというと、音楽は感情を揺さぶったり、あるいは情動を呼び起こしたりすることができるため、かえって制作者はよく音楽に頼りきってしまうことがあるからです。映画は他の要素、視覚的な要素を使って情緒や考え方を伝えるべきなのに、音楽ばかりに頼っている。だから真剣に映画を見るためにこういう批判も授業で取り上げます。

ビュテル　すいません。ふるさとの話題に関してですけれども、言い忘れたのはゴルフ場に行くのにふるさとの歌が流れている、そのずれがあるんですよね。音楽がわからなければそのずれはわからない、映画の意味がわからない。要するに映画と音楽の関係が複雑でアイロニカルな関係もあるし、それはただ感動するかどうかだけではないと思います。

近藤　音楽はたいへんおもしろいポイントだったと思います。『ファーゴ』という僕の大好きな映画があって、確かあの映画は映画音楽を最初から最後まで一切使っていなかったんじゃないかなと思います。それぐらいしか思い浮かばないんですけれども、例えばそういうもので完成する映画もある。ワトキンス先生のレスポンスというか、追加情報で。で、ワトキンス先生のお話でちょっとつなげていくと、映画としてやはり視覚効果が一番大事なんだというのはわかります。しかし他方、やはりそれだけじゃないんじゃないか。今日のワトキンス先生のお話というのは芸術一般が持つある感情の高ぶり、それが日常的な激情ではなく、精神の拡張を伴う、人格変容にいってしまうような、そういったことを、映画だけじゃなく芸術一般はなしうるのだと。それははっきりしていることですね。

私の発表にひきつけてみれば《宗教とは呼ばれないけれども宗教と共通するもの》として芸術がある、ということになります。このことについて日本人に一番分かりやすい、私の勤務校は女子大ですから、女の子に一番わかりやすいのは恋愛というものですが、ともあれ、映画というのはそういった面もあって、ワトキンス先生は完全な映画マニアでいら

っしゃるからあれですが、一般大衆の映画視聴ではやはり、映像と音響との複合的なメディア効果の中で、どんなものかわからないけれど、ともかく何らかの体験を得る、これは事実ではないかと思います。それからインドの話が出たのでもう一つだけいうと、私の発表で紹介しきれなかった『ボンベイ』という映画があります。この音楽は本当に素晴らしいです。この映画はヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の殺し合いを描いた映画です。インドの宿阿といってもいい、パキスタンとの分離がありましたから、もうどうしようもないぐらい深刻な問題です。で、この音楽家というのが実はヒンドゥー教徒の家に生まれ、あとから母親が再婚してムスリムになったというように、ヒンドゥーとムスリムを移り変わった人です。インドではアンタッチャブル以下に思われても仕方ないくらいの、非常にタブーを犯した境界的な存在の人が音楽を作っています。そこでは、イスラームの祈祷の音楽とか、民衆音楽の要素をたくさん取り入れて素晴らしい楽曲を作ったというようなことがある。この場合、音楽そのものもメッセージだし、作曲家の存在そのものもメッセージになっているわけです。『ボンベイ』は音楽好きであればぜひ見ていただきたい一本です。

中町　今近藤さんがおっしゃられたＢＧＭをまったく排するというのは、「ドグマ 95」という映画監督たちのグループがあるようですね。それでベルギーのダルデンヌ兄弟監督であるとか、一部の作家監督はまったくＢＧＭを排して、でもドキュメンタリーではないという映画を作る監督集団がいるのは確かです。音楽を使うと安易に観客の情動を刺激するということで批判する批評家がいるというのも良くわかることなんですが、今日私が取り上げたエジプトというのは大衆映画の王国でありまして、今日ご紹介した『炎のアンダルシア』というのは実はミュージカル映画でして、劇中で吟遊詩人が登場して自由を謳歌する歌を歌うんですね。それを演じている役者さんがエジプトでは非常に有名なムハンマド・ムニールという歌手でして、演じながら歌う、パフォーマンスをするというシーンが効果的に使われています。また、発表中に申しましたけれども、ドラマのほうの『サラディン』では、アラブ人ならおそらく誰もが知っているマフムド・ダルウィーシュというパレスチナのディアスポラ詩人の詩を、アサーラという女性の歌手が歌い上げていまして、これがかなり大衆層にはビビッと来るものだったと思うんですね。

これらはいずれも高尚な芸術としてはあまり評価されえないものかもしれませんが、大衆映画として観客がこの映画を見てどう反応するかというのを考える上では非常に効果があったというポジティブな評価も可能ではないかと思います。音楽に乗せて世俗的な価値観を歌いあげるのがエジプト大衆映画の醍醐味だと考えられるのではないかと思います。そのようにして説明できるのではないかと思います。

井上　この音楽という問題、これだけでなかなか大変なテーマになりそうな気がします。あまりこれを取り上げようと思っていなかったのですが、こうやって質問をいただくと、これも映画を教材として考えるとき、なかなか重要な問題になりそうです。制作者側のメッセージというのが含まれている場合もあります。あまり面白くない映画を面白く見させるテクニックとしてもある。これはテレビドラマのときには、よくありますが・・・。見るほうも、なぜこの音楽がここで流されたのかということも考えないとわからない映画もあるということですね。臼杵さんのおっしゃったように、それを知っているともっと深い背景が見えてくるということで、教える側にも難しい問題が出されたなというような気がします。いいご質問をいただきました。

次に教育的な意味について、会場からご意見いただいております。

質問者C　学習指導要領で今回改訂があって、宗教文化教育について、中学校社会科でもそういったものを取り入れてというふうなことが出ています。今日井上先生の編集された『映画で学ぶ現代宗教』を買わせていただきましたけれども、ちょっと自分の時間に映画を使ってやってみたらいけるんじゃないかという人も、やはり出てくるのだろうなと思います。その意味では先ほどご指摘があったように、教える側がどのように分析してどのように吟味して批判的に、あるいは何を切り取って教えるか。中学校だと 50 分、小学校だと 45 分しかありませんから、教える側がどういうふうに考えていかなければならないかこれは先ほど論じられました。

けれども、そういった、特に義務教育の現場の教員に対する宗教教育の指導力はどうやってつけていくのか、井上先生がかねてから主張されている宗教文化士のことになると思うのですけれど、その中で私が今日一番示唆を受けたのが、コメントの中でも西村先生がおっしゃった宗教というものを通して客観視して自分というものを見直すことができる。そのような視点について、もう少し触れていただけたら、あるいは大学の現場ではこうだよ、自分の研究ではこうだということを提示していただけたら、ありがたいと思います。

井上　今日の発表はおそらくみなさん大学レベルにおける映画の利用ということに関してお話していただいたと思いますし、我々もそのつもりでした。しかし、中等教育で先生が映画を使うということは大いにありうるわけです。特に宗教系の学校ですと、キリスト教の学校ではキリスト教の基本的な映画を見せているところがたくさんあります。そういうこともありますので、今のご質問にありましたように、初等、中等教育でもし映画をということになったとき、気をつけなくてはいけないことを、西村さんお願いします。

西村　ご質問ありがとうございます。実は私自身まだ教員歴が浅いので、具体的な成果としてお示しできるものを持っておりません。ただ補足的に私の発言を説明しますと、おそらく今想定されている宗教文化教育というのは日本の宗教についての教育というよりも、むしろ異文化であったり、異なる他者の宗教についてのことだと思われます。それについてはどう切り取るかという問題については、これからも具体的な資料作りといいますか、たとえば教科書で言えばリーディングスみたいな形で、必要なところだけを取り出す形で映画のある部分だけを取り出してそれに補足的な説明を加えるようなものは可能だと思われます。

これはおそらくこれからの課題だと思いますが、一つ私がコメントの中で言いそびれたことがございまして、特に日本の、ビュテル先生が今回ご紹介されました日本の民間信仰であるとかフォークレリジョンと呼ばれる領域、あるいは神道の文化もそういった傾向があると思いますが、自己言及性が乏しいと言いますか、なかなか言語化されない部分というのが多いんですね。非常に実践的な祈りだったりとか踊りだったりとか、そういった部分が強くて、それに対して祭りをやっている人もどういう意味でもってそれをやっているのかということを説明ができない。「以前からやっているから」というような説明があったりだとかですね。それについてどう説明するかは、私自身も学生に日本の宗教性を教えるのに非常に困難なところがあります。

なので、むしろそれはインタラクティブな形で、「海外ではこう言われている、それについてみなさんはどう思うか」という形のやりとりは大学レベルではできると思うのですが、それを今度は中学や小学校でディスカッションのような形でどの程度限られた時間の中で行えるかというのは、いまひとつ具体的なイメージは私は持ちえていません。そこには、もう一歩教師側の準備作業と言いますか、前もって補助線を引いておく作業が必要になってくるだろうと予想されます。

近藤　小中学生に対しては、ドキュメンタリーがいいのではないかと思います。今日の話であったように、物語とかだといろいろ説明しなければならなかったり、注意点が多かったりで大変ではないかと思います。私がぱっと思いつくのはナショナルジオグラフィックが、確か世界の諸宗教というのでシリーズを作っていたと思います。問題はそれが字幕になっているというところですけれども、本のほうは良くできていると思いました。たとえばああいったものが使えるのではないかと思います。西村さんもおっしゃいましたけれども、日本の宗教をやるとき、これは大学の範囲ですけれども、とにかく外国の方の解説が一番役に立つという実感があります。ポイントをはずさず、客観的、包括的に見ているのはやはり外からの目だという気がします。

井上　この宗教文化教育のプロジェクトを始めてから、中学校、場合によっては小学校、さらには幼児教育をされている方から、宗教の問題を扱うにはどうすればよいのかという問い合わせを個人的に若干受けました。すっと答えられればいいんですが、そもそも大学教育におけるやり方をどうするのかということを今ようやく議論が始まったところです。個人的には試みられているんですが、それはあくまでその人のポリシーとか面白さとか、学生の興味を引かせるものだとかという理由で映画を見せていることが多い。それが宗教文化教育の一環ということになると、情報交換することで、ワンランク、ツーランク洗練された利用法が出るのではないかと考えています。

したがって、中等教育にどう還元できるかということは、おそらくその次のステップになるでしょう。我々がよいというものでも学生が思わぬショックを受けてしまうような場合もあるし、非常に面白いと感動する学生もいるかもしれない。そういう大学での事例を見ながら中等教育では、ということになるのかもしれないと、残念ながら今の日本ではそういうレベルのような気がします。むろん、我々だけの議論ではなくて、現場で教えておられる先生方との意見交換というのが必要になってくると思います。

山中　今の議論は大事だと思うので補足したいんですが、実は私は宗教教育に関するいくつかのシンポジウムに関わっているんですが、非常に問題になるのは、小・中・高の先生はもちろん宗教文化教育を受けたことがないんですね。ですから宗教知識をしらない、宗教を体系的に勉強したことがないという状況があって、これは非常に大きな問題になってくる。先ほども申したように、こういう映画を使って学生さんに見せるときに、大事なのは先生が映画をどう解釈し、与えるかという先生自身の宗教に関するものの考え方、知識の深さ等々が非常に重要な問題となってくる。

ところがそれが一切、政教分離の問題等々で、これまで教えられてこなかった。これがいいかどうかは別問題ですが、少なくともそういう現状があるということが、宗教文化を考えるときに、特に中等教育で宗教文化を教育するときに非常に大きな問題に今後なってくる。それに対する我々の側の対応も十分ではなく、井上先生を中心に、それをやっとこういう議論が始まった程度です。ですから我々宗教学者は宗教の専門家ですから、宗教について知っているはずですが、やっとこういう取り組みが少しでてきたという意味で、その問題は非常に大事ですし、今後も議論されていく問題ではないかと、大変いいご指摘だったのではないかと思います。

井上　では、また会場の方からの質問を受けたいと思います。今、質問された方、もう一

度どうぞ。

質問者C　近藤先生にお答えいただいたドキュメンタリーの問題ですが、現場からの反応を一つ申し上げます。一番影響を受けたのは『サウンド・オブ・ミュージック』。もう一つはNHKの『海のシルクロード』。説明するものは中学生には受けないんですね。それよりもストーリーがあるもので、先生が説明してくれるもののほうがおもしろいと。そういうものが現場からの意見です。

井上　事前に質問をいただいていたのは以上ですが、今の議論を聞いて何か質問をしたいという方いらっしゃいますか。

質問者D　ワトキンス先生に質問です。第一に、学生との対話の中で、宗教の定義というのが問題になると思われますが、先生のおっしゃった「家族的類似性」についてご説明ください。第2に、先生が取り上げられた映画はいずれも素晴らしい傑作であるといえますが、しかしもし大衆的な宗教性に目を向けるならば大衆的な、つまりそれ程傑作ではない映画も取り上げなくてはならないのではないでしょうか。

ワトキンス　家族的類似性についての質問ですが、発表の中で宗教の類似性を3つに分けることができると言ったのですが、実体的、機能的、家族的類似というこの言葉自体は、ウィトゲンシュタインというオーストリア出身の哲学者の言葉です。つまり、いくつかの大きなグループの中で全て共通ではないがある程度類似するものがあるというふうに考えられるものを指す言葉で、例えばこの宗教には巡礼があるが、もう一つの宗教も巡礼がある。こうしたことを出発点として、大きく宗教という枠組みのなかで議論することができるのではないかと思います。

次に、大衆的な映画についてですが、2点述べます。まずそれらを取り上げたい気持ちはもちろんありましたが、限られた時間ということで取り上げなかった面があります。もう一つの理由として、彼らの考え方に変化を与えたいというものがあります。学生たちは大衆である以上、大衆的な映画を知っており、日常的にそれを見ています。ですから逆に一番良い映画、傑作を取り上げなければならない。そうしないと見る機会がないし、彼らの考え方も変わらない。大衆映画は彼らにとって当たり前のことですが、むしろこの特殊な、素晴らしいものを取り上げたいと思ったのです。

井上　もう少し時間的余裕がありますので、発題者、レスポンデントのみなさんにご意見

をうかがいたいです。今日とりあげたテーマとしては、宗教と世俗の問題、虚と実の問題、メディアリテラシーの問題など、さまざまなものがございます。もう一回あらためて議論して欲しいという方がいらっしゃいましたら手を挙げていただけばと思います。

ビュテル　近藤先生に質問ですが、宗教は近代的な概念のカテゴリーだとおっしゃったと思うんですね。確かに日本のコンテクストを見ますと、宗教という言葉は明治時代にできて、カテゴリーとしてはなかったというのは確かです。ただ、ご存知のようにレリジョンという言葉はぜんぜんそうではないです。例えばreligioという言葉が11世紀から見られるわけで、ぜんぜん近代的カテゴリーではないです。歴史的に見ると近代とか中世とか現代とかいえないと思うのですね。ただ宗教が出てくると迷信という言葉も同時に出てくる、日本語も同じだと思いますけど、宗教というのは非常に細かく作られているカテゴリーだと私は思います。ゴミ箱として作られているのが、現代の宗教というカテゴリーだと私は思います。面白いのは、近藤先生のお話を聞いたときに思ったんですが、映画は19世紀から20世紀のもので、とても近代的、現代的なメディアです。要するに日本の宗教の概念と映画の概念というのは同時に動いた、というふうに考えるとおもしろいのではないかと思います。

近藤　いろんな議論ができるポイントだと思うんですが、日本とヨーロッパの違いというと、宗教と呼ばれるものに、ヨーロッパの場合、キリスト教会という強烈な中心がある。これは11世紀も全部一緒だと思うんです。一方、日本では江戸時代までキリスト教会に匹敵するような中心がなかったところに、明治以降、「宗教」と呼ばれるグラビティポイント（重心）が作られるわけですけど、それを担っているような伝統的な制度とか、前近代的な感覚というのが日本にはなかったというのが大きな違いだと思うんですね。

ヨーロッパでは迷信との間、あるいは魔術／呪術との関係で「宗教」というのは細かく分節化されているんですけれども、日本の場合は結局そこがボヤッとしたまま今に至っていると僕は思っています。教会に対して戦ってきた、そういう記憶がヨーロッパの方々には大変強くあるのでしょうが、我々にはそういう記憶があまりない。そこの違いゆえに、日本で宗教概念は簡単にゴミ箱化する。何でもかんでも宗教っぽいね、宗教みたいだね、といっている割に実態がはっきりしないというのがすごく日本的なのかなと。その他の東アジアはわかりませんが。2つめについては、申し訳ないですが、ちょっとここですぐに何か言えるということが思いつきません。

井上　このポイントは近代で考えるということは、結局すべてが近代に関わっているので、

宗教だけというわけではないので、その辺近藤さん考えてくださいという話だと思います。これは今後の課題としておきたいと思います。

櫻井　これは私自身も良くわからないことですが、例えば映画の中でスピリット、霊ですね、ゴーストでもいいんですけれども、そういったものを扱う映画があります。日本の中でそういうものを見せて、霊というものは存在するんだと、ある種恐怖の感情を喚起させて、先祖供養や水子供養をさせる団体というのがあり、巻き込まれる人達もいます。アメリカでもヨーロッパでもいいんですが、映画の中でスピリット、霊、ゴーストといったものを学生に見せる際に、こういうものをどう考えたらいいとか、宗教において霊的なものをどう扱うのかについてどなたか教えていただけないでしょうか。

井上　これはかなり厄介な問題ですけれども、例えば宗教をまったく信じていない人にすれば起こってくる問題ですので、この辺どなたか考えられたことがある方いらっしゃればお願いします。

ビュテル　その質問は山中先生のおっしゃっていることと関係があると思います。フランスでは 18 歳はオトナで、酒が飲め、タバコが吸え、選挙権が持てます。大学というのは大人の世界です。大学の目的は――フランスらしい考え方かもしれませんが――、自分が持っている疑問をいわなければならない。要するに疑うということをフランスの先生は一番教えます。授業ではこれが正しいとか、間違っているとかを教えることは絶対しないし、私だけではなく、皆そういうふうに教育されたわけです。大人ということで考えているということです。ただ、すごく怖かった授業があって、小松和彦先生がいらっしゃったとき、怖い日本の映画を見せてくれました。フランスの先生は信じてないけど怖かったといっていました。日本の映画ではそういうパワーはあるかもしれませんね。

井上　これは幽霊とかゴーストとか言うことが話題になっていますけど、神や仏という場合は違うのでしょうか。つまり実在を証明できないものなので、それぞれ皆イメージしているものですよね。仮に神がいるかのように描く映画と、ゴーストがいるかのように作られた映画とは、危険度が違うとか意味が違うというような前提になるのでしょうか。

櫻井　神とかホトケとか、大きな話を私は考えてはおりません。学生には、たとえば死後の世界があるだとか、超自然的な力で呪術的なものを信じるかとか、そういうスピリチュアルな世界に近い感性をもった人がけっこういると思うんですね。そういう中で「オーラ

の泉」とかが流されたり、いろんな映画を見るなかですごく影響されたりというところもあって、その延長線上で私は霊感商法だとか、スピリチュアルブームだとかが日本で出てきていると思うんです。私の立場ですと、そういうものには注意しなさいと学生に口を酸っぱくして言うんですけれども、こういう問題の扱いというのは、基準を設ける必要はないと思いますが、宗教文化とか宗教を伝える中でどういうふうに扱うべきものなのか、扱い方というのはナイーブな部分になるのかなと思います。信仰を持っている学生に対してあまりそういうものを信じることは云々とは言えないですし、なかなか難しい問題じゃないかと思いました。

山中　今の問題は非常に難しくて、学生はもう大人だから自分の判断に任せるということは確かにあると思うんですが、ただご存じかもしれませんが、日本の場合だと授業でオウム真理教のビデオを見せて学生が入信したとなると、それは先生の責任だと言われたりと、授業に対するアカウンタビリティというのがものすごく最近問われていて、パワーハラスメント、セクシャルハラスメントなどなど、あらゆる言動に対してものすごく我々自身がセンシティブになっているのは事実です。そして宗教と同じように、先ほど近藤さんがおっしゃっていましたけど、映画というのはものすごく感情というものを触発しますので、そういう中で、学生達が映画を通じてそういうものを信じ込むという可能性を意識していかないと、ただプラグマティックに面白そうだとか、日本の文化を伝えるのには『ぽんぽこ』だとか、それは良いと思うんですけど、そういう非常に大きな問題はそこにあるかなと思います。

櫻井先生がおっしゃられたように、そういった問題が今後の宗教文化教育として映画を使っていくというときにあると思います。先ほども言いましたように、先生の資質というもの、つまり、かなりしっかりと考えたうえで素材を提供していかないと、そういうような問題に直面してびっくりしてしまって、かえって映画を使わない方が良いというふうになってしまっては良くないと思うんですね。私はワトキンス先生がおっしゃったようなメディアとしての映画というのを、もっと論ずるべきだと思いますけれども、今はこういう議論になっているのでコメントしました。

近藤　まさに渦中の日本女子大学の・・・。それは冗談としましても、そういうことがあったので非常に気を遣っています。今私が実際にやっていることは、まず一つ目は櫻井先生の論考をたくさんコピーしまして、カルトという概念を学生にしっかり伝えることから始めます。2 つ目に、不可知論という概念を伝えます。たとえばあの世はあるのかないのか科学的に証明できないし、神の証明は存在も証明できないし非存在も証明できない、と

いう考え方もあるんだと。そして3つ目は、今日たくさんお話がありましたけれど、何でも科学と合理性だけでは人間は幸せになれないのだと。そういうビジョン自体がおそらく間違っているのであって、曖昧模糊とした時に、失敗もする人間を全部組み込んでそれで物事が成り立っている。要するに曖昧なものを残すということ。映画に引きつけますと、不可知論と曖昧ということを伝えるために、『エミリー・ローズ』という映画を学生に紹介します。ちょっとバランスを失っているシーンがひとつだけ、神父さんが車にはねられるというシーンだけが玉に瑕なんですが、そこさえ除けば、今申し上げた曖昧さと不可知論というものを、映画として非常に良く表している。そのワンシーンさえなければと思う映画です。一方カルトの問題を映画で伝えるとなると今のところ見つけていない。普通だったら『ある朝スウプは』という日本映画を出すんですが、あれを学生に見せても、カルトの本当の問題はおそらく伝わらない。すっと入ってアレレと思っているうちに出られなっていく、あの感覚ですね。あれを上手に伝えている映画だとは僕は思っていなくて、今のところカルト問題は櫻井先生の論文だけが頼りで、映画ではまだ伝えきる自信がないというのが現状です。

冨澤　冨澤です。映画を使う時の教師のリーダーシップとインタラクティヴィティについてあらためてご意見を伺いたく思います。先ほど、恐怖を喚起させる、強い情動を呼び起こすような映画の力に関するお話があった時に、山中先生は、今も繰り返しおっしゃいましたが、映画というものがきわめて強いものであるという認識を持たなくては非常に危ういということを指摘されました。これはつまり、映画の力の問題と教師の力の問題とがワンセットになるということであると受け止めました。教師というものは非常に強いもので、一定の能力さえあれば、生徒をどのようにでも誘導できるだけの権力を持っているといえます。もちろん誘導する能力の不足で、失敗してふらふらするという問題もあるんですが、できるできないはともかく、生徒の理解をこちらにもっていきたいという意図をまるで持たずに、生徒の自主性なるものにすべてをゆだねられる教師など正直いないはずだと私は思います。

ただ一方で私たちは、インタラクティヴィティというものを非常に大事にしたいと思っていますし、生徒達に自ら考えて欲しいと言っているわけで、そこに矛盾があると思うのです。やはり、様々な理解の可能性があろうとも、この辺が落としどころだろうということをまるで考えなくては、授業計画が成り立たない。その秘かな恣意性の問題を、私たちは仮にも専門家であり、生徒達より少しはものを知っているであろうということで、無視して正当化しているわけです。しかしそれは結局、実は極めて暴力的な力を、ただ柔らかく使っているだけではないか、という疑問がついてまわるのです。そこで特に本格的に映

画を講義の素材として用いていらっしゃるビュテル先生とワトキンス先生にお聞きしたいのですが、インタラクティヴィティの中で、自分の予想外の着地点に授業が進むということもしばしば起きうるものでしょうか。そして教師自身の宗教観なり、映画の解釈が刷新されていくというような体験はおありでしょうか。この問題について、何か体験やご意見がおありでしたら、他の先生方からもぜひうかがいたいと思います。

ワトキンス　私の目的のひとつは、やはり学生を混乱させることです。私のメソッドは対話方式ですので混乱は喜んで受けいれます。意外さは大切です。意外な方向に話が持ち込まれるのは私にとっても勉強になります。心配としては、十週間一緒にいたその後どうなるか分からないことぐらいです。

それで、さっきの映画で狸が変化するということが多くあったのですが、そういう実際に変化するプロセスというものは図像的にあったのでしょうか。あるいは映画によってそれが初めて表されたのでしょうか。

ビュテル　私よりもジョリオン先生や、日本の先生の方がよく知っていると思いますけれども、絵巻物から浮世絵までの研究を高畑監督はしました。その本も出ています。

ジョリオン　少しだけ付け加えます。絵巻とアニメを直接つなげるのは簡単ですけれども、絵巻研究の進展につれて、わかってきたこともあります。確かに絵巻のひとつのシーンが変化を表している場合もあると思いますが、とても古い絵巻の中では、私の知っている限り、同時的な描写と同時ではない通時的描写をしているシーンの両方があると思います。だんだん絵巻の技術が進化しますと、背景にある木がひとつのシーンとひとつのシーンを分ける機能を果たすようになってきました。だんだんその機能が工夫されまして、黄表紙とか漫画とかアニメ技術に発展していったと思います。要するに、そうした絵巻の歴史の中に、変化する図像的な描写を少しかいま見ることができると思います。

西村　今はアニメーションの歴史として語って頂きましたが、もうひとつ押さえておくべきなのは人形浄瑠璃だとか歌舞伎とか、映画で言えば実写版の方ですね。実写の方でも瞬間的な移動といった変化を見せることは可能だと思うんですが、飛んだり宙を舞ったりといった動作はこれは人形の方ではある程度可能なことであっても、人間がやれば物理的に不可能です。アニメーションではそうしたイマジネーションの部分を効果的に表現できるというところがこれまでの表現技術よりも格段に進化した部分ではないかと思います。

井上　議論が少しずれていきそうですので、最後に山中さんお願いします。

山中　今回は、どう映画を使って宗教を教えるかという方向性の議論が大方でした。ただ先ほどワトキンス先生もおっしゃったような、メディアとしての映画という問題を、映画を使ってどう教えるかという問題に解消しない方が議論としてはおもしろい。つまり、この問題を論じる場合には、2つの領域があると、あえて言うならばですよ。そういうメディアとしての映画というときに、今日の場合ですと、ジョリオンさんのテキストとして考える場合でも、単にテキストとしてやるというワトキンス先生とは違った立場で映画をどう研究するのか。現代社会において映画とはどういう意味を持つのか、どういう機能を持つのか。それは宗教というものが持っていた機能と別の仕方で宗教的なるものの機能を果たしていると、私はいつもそう思うんですけれど、そういった議論も、映画を使った教育という議論に回収するのではなく、もっといろいろと議論をする余地があるのではないかと思いました。

井上　ありがとうございました。まだまだ議論したいところですが、時間が過ぎてしまいました。最後のほうで冨澤さんの質問にもありましたけれど、どこまで見せるか、どんな立場かというのは厄介な問題です。私自身は、オウム真理教について教える場合は、『A』、『A２』ではなくて、オウム真理教の教団作成のビデオを選んで見せたりします。ですがこれは他の人には勧めません。どこまでが見せていいかという判断は、新宗教の専門家でないと、なかなか難しいと思うからです。

つまり、一般的にこれは良くない、これはアブナイという議論だけではなくて、個々の教員が是非を問われたときに、どのように、またどこまで対応できるかという問題も絡んでいます。なかなか一般論では片付かないと思います。ですから、仮に私がイスラーム関連の映画を見せるときには、つっこまれたときの用意として、臼杵さんの本とか読んでおいて、それで答えられる範囲の映画でやるという、そういう選択の仕方もありうるでしょう。しかし本日のような議論を重ねていくと、多くの知識を教員側がシェアすることになるので、見せられる映画が増えるのではないかというふうに思っているのです。

冨澤さんの言うように、自分の所に戻ってくるかというようなことなんですが、戻らないと面白くない。ワトキンスさんのお話もそういう趣旨だったと思います。映画を教材に学生に何かを教えてやるというよりは、ともにいろんな事柄について考えてみようということだと思います。

先ほどの冨澤さんの質問に対して、私として言いたいことがあるのですけれども、確かに教員は、結局のところ、何かインストラクトすることになるんです。しかし私が宗教文

化教育を推進するときの一つのコンセプトとしては、これは良くないはずだ、避けた方が良いといった価値観は、教師が出してかまわないということがあります。何らの価値観をもたない教育というのは考えられないです。クリスチャンになりましょうとか、良い宗教情操を培った人になりましょうということになると、それぞれの立場からの価値観があって、なかなか一つの価値を前面に出すのは難しいでしょう。けれども、このような主張を続けたら殺し合いにいくしかなくなるではないか、それでいいんですかとか、それくらいの価値観の提示は、仮に押しつけ的になったとしても、出して良いと思っているんです。

今日はいろんな立場の人、いろんな意見を出していただきました。最後まで非常に盛り上がりましたので、大変充実していました。最後までお集まり頂いたみなさん、発題者、レスポンスの皆さんに感謝致しまして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。